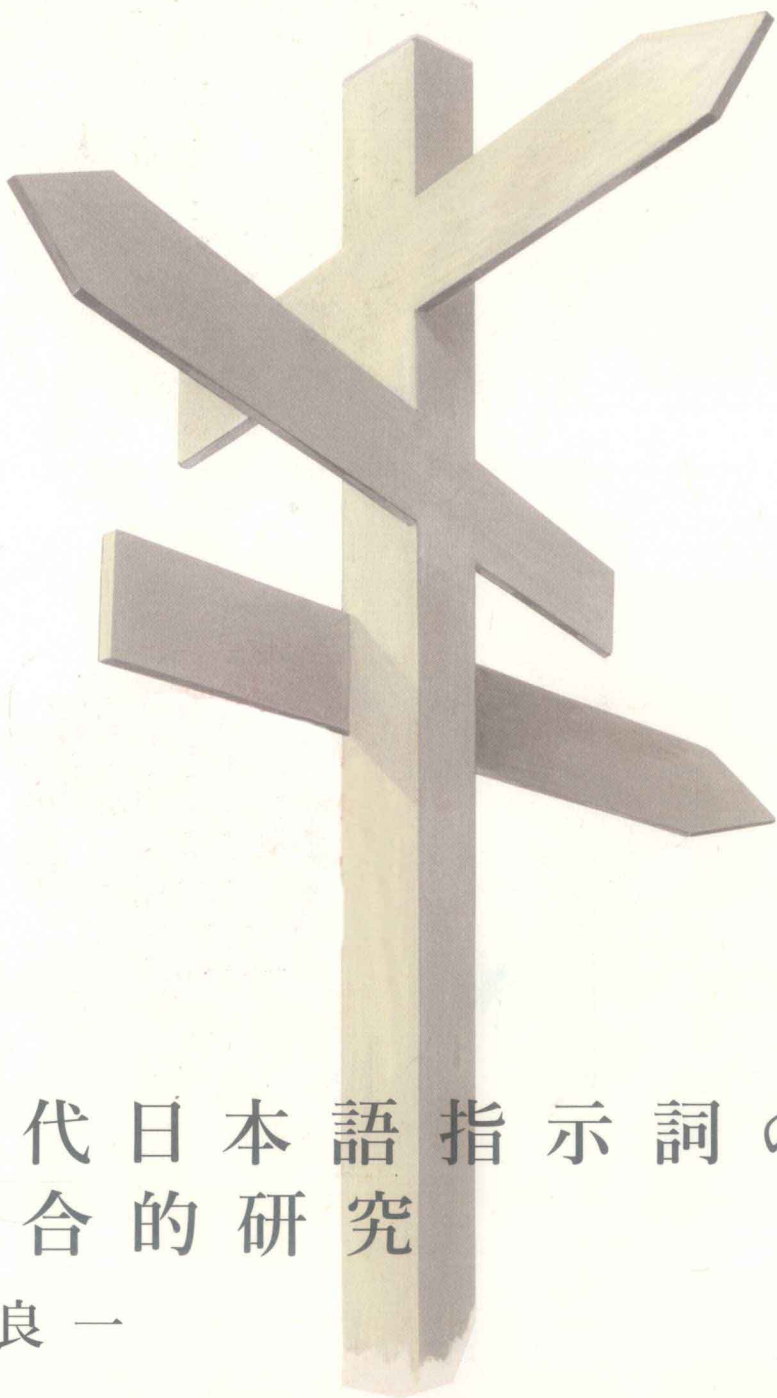




現代日本語指示詞の 総合的研究

堤良一



常州大学图书馆
藏书章

現代日本語指示詞の
総合的研究

堤良一

現代日本語指示詞の 総合的研究

2012年2月10日 初版第1刷発行

著者・堤良一

発行者・吉峰晃一郎・田中哲哉

発行所・株式会社ココ出版

〒162-0828 東京都新宿区袋町25-30-107

電話 03-3269-5438

ファックス 03-3269-5438

装画・ケッソクヒデキ

装丁・組版設計・長田年伸

印刷・製本・モリモト印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります

ISBN 978-4-904595-17-6

序

本書は、堤良一君がこれまでに発表してきた日本語の指示詞を中心とする論考を、その後の研究の成果を取り入れて修正し、かつ、研究書として1つの「システム」となるよう有機的に組織化したものです。

堤良一君は、大阪外国語大学外国語学部（統合により現在は大阪大学外国語学部）のポルトガル・ブラジル語学科を卒業し、同大学大学院の修士課程日本語学専攻に進学しました。日本語学専攻は、当初は学部を持たない専攻として出発しましたが、同君が入学してきた頃は、既に学部日本語学科が設立されており、当然ながら、大学院への進学者のほとんどが学部からの内部進学者でした。それまでも他学科からの進学者は少数おりましたが、ポルトガル・ブラジル語学科からの進学者は同君が最初ではなかったかと思います。言語学を学びたいという本人の希望はもちろんありましたが、私自身が旧大阪外大のイスパニア語学科出身だったこともあり、近接言語ということで私が指導を引き受けることになりました。

ただ、入学当初は理論言語学の知識も十分ではなく、同君もかなり迷ったようです。修士課程1年目の秋頃だったように記憶しますが、思い悩んだ表情で研究室に現れ、退学したいとのことでした。どの道に進むにせよ修士号は取っておけと助言したように思います。それからでした、同君が「化けた」のは。大学院において、化ける（突然変異的に研究が飛躍する）学生がまれにおりますが、同君は、その最も劇的な例だったと言えます。日本語の指示詞という奥深い研究テーマを見つけたのもこの頃だった筈です。翌年秋の日本言語学会大会での研究発表を嚆矢として、憑き物が落ちたように続々と発表を行うようになり、その後は一貫してこのテーマを中心に研究を進め今に至っています。

修士課程を修了した後、新たに設置された博士後期課程に進学しましたが、岡山大学文学部の専任講師として採用され、いったん退学することになります。岡山大学に在職しつつ、社会人大学院生として再入学し

たのは、その1年後のことでした。

いま振り返ってみれば、同君は様々な「幸運」に恵まれてきたように思います。修士課程在学中に退学しなかったこと、早い時期に専心できる研究テーマを見つけたこと、奉職先の大学のご厚意により博士後期課程に再入学できたことなど、1つ歯車が狂えば今の状況も変わっていたと思われる幾つかの節目を乗り越えてきました。研究者は、自らの研究対象に「惚れる」のが最も肝要ですが、研究を進めていく過程で何度も遭遇する壁に立ち向かう「しつこさ」も必要とされます。堤君はこれらの資質を見事に体現しています。が、もう1つ必要とされるものがあります。それが「幸運」です。もちろん、最初の2つの資質がなければ、3つ目のものを活かし切れないことは言うまでもありません。これらを兼ね備えた堤君の研究者としての将来を私はほぼ確信しています。

本書の内容については、より反証可能な「システム」に昇華できるのではないと思われる点もありますが、私がとやかく言う前に、読者（教育者・研究者・院生など）による検討及び批判に委ねるべきであろうと思います。本書での多くの提案について、賛成するにせよ反対するにせよ、日本語指示詞体系の今後の研究は、本書抜きに語れないことは間違いありません。私は、研究者にとって最も重要なこと、すなわち、研究者としての存在意義は批判されることにあると思っています。建設的な批判であればさらに有難いと思います。その意味において、本書が批判の対象となることを祈願しています。

三原健一

第1部

■ 記述的考察の部 // // // i

第1章

本書の目的と構成 // // // 3

1 本書が目指すもの // // // 3

2 本書で解決する問題 // // // 4

3 本書の構成 // // // 5

第2章

本書における基本的な立場 // // // 9

1 指示詞について // // // 9

2 現場と文脈 // // // 10

3 記憶指示 // // // 12

4 人称区分説と距離区分説 // // // 14

5 コ・ア vs. ソ // // // 16

6 話者と聞き手 // // // 17

6.1 聞き手の知識を想定しないモデル // // // 17

6.2 聞き手の知識を想定するモデル：東郷（2000） // // // 20

7 「テキスト的意味の付与」 // // // 23

8 指定指示と代行指示 // // // 23

9 メンタル・スペース、場面と場 // // // 24

10 理論は統一的であるべきか否か /////25

11 第2章のまとめ /////26

第3章

文脈指示における
コ系列指示詞とソ系列指示詞 /////29

1 考察の対象 /////29

2 先行研究 /////30

3 分析の方法 /////32

3.1 object dependent/object independent /////33

3.2 不定名詞と変項 /////35

3.3 「話し手にとって指示的」 /////36

4 本章における仮説 /////36

5 問題の分析 /////37

5.1 置き換えが不可能な場合 /////37

5.2 置き換えが可能な場合 /////39

6 変項と複数解釈される名詞句 /////40

7 問題となる現象 /////42

8 第3章のまとめ /////43

第4章

ソ系列指示詞と変項
「テキスト的意味」を中心に /////45

1 はじめに /////45

2 先行研究 /////47

3 ソノと「テキスト的意味」 /////48

4 テキスト的意味の量 ////50

5 ソノとソレ ////53

6 ソレの構造 ////55

7 不完全同一性 ////57

8 第4章のまとめ ////58

付録 堤 (1999) について ////59

第5章

指定指示と代行指示 ////63

1 はじめに ////63

2 先行研究 ////63

2.1 田中 (1981)、林 (1972, 1983) ////63

2.2 坂原 (1991) ////65

3 庵 (1995a, 1996b) ////65

3.1 庵の主張 ////66

3.2 名詞の構造 ////66

3.3 代行指示のソノとテキスト的意味 ////70

3.4 ソノの構造 ////72

3.5 ここまでのまとめ ////75

4 代替案 ////76

4.1 はじめに ////76

4.2 飽和名詞句と非飽和名詞句 ////76

5 第5章のまとめ ////80

第6章

テンスを越えて照応する 「ソノ／コノ+1項名詞」について //83

- 1 はじめに //83
- 2 庵 (1995a) —— テンスを越える場合の分析 //84
- 3 1項名詞の種類とテンスを
越えるコノでの照応可能性 //88
 - 3.1 1項名詞の種類 //88
 - 3.2 全体－部分の関係にある名詞 //89
 - 3.3 動詞や形容詞から派生したもの //90
 - 3.4 コト性を持つ名詞 //93
 - 3.5 相対性を表す名詞 //96
- 4 第6章のまとめ //97

第1部のまとめ //99

第2部

モデル構築の部 //101

第7章

文脈指示におけるモデル構築 //103

- 1 残されている問題 //103
- 2 談話管理理論 //106
 - 2.1 理論の概観 //106
 - 2.2 談話管理理論の問題点 //109
 - 2.3 庵 (1997, 2007) //110

3	モデル化	////I13
3.1	本書におけるモデル	////I13
3.2	第3章の再検討	////I15
4	データの分析	////I17
4.1	コノ/*ソノ	////I17
4.2	コノ/ソノ	////I21
4.3	*コノ/ソノ	////I26
5	第7章のまとめ	////I32

第8章

現場指示のソ系列指示詞

1	はじめに	////I37
2	ソ系列指示詞と文脈指示用法	////I39
3	ソ系列指示詞の本質と現場指示用法	////I40
4	現場指示に用いられるソ	////I41
4.1	聞き手とソ	////I41
4.2	聞き手の領域	////I42
4.3	「映像化」再考	////I44
4.4	仮説	////I46
5	分析の論拠	////I49
5.1	制約のキャンセル可能性	////I49
5.2	文脈指示における現象	////I50
6	分析の利点	////I52
6.1	曖昧指示	////I52
6.2	聞き手の存在	////I53
6.3	二項対立 vs. 三項対立	////I53
7	第8章のまとめ	////I54

第9章

指示詞モデルからみたア系列指示詞 //157

- 1 はじめに //157
- 2 モデルの問題点と補強 //158
 - 2.1 問題点 //158
 - 2.2 モデルの補強 //158
 - 2.3 直示の再定義 //161
- 3 コ／ア //163
- 4 ア系列指示詞の記憶指示用法 //165
- 5 テキストのタイプ //168
 - 5.1 リンク //168
 - 5.2 文脈指示とはどのようなテキストタイプか //170
- 6 第9章のまとめ //173

第10章

文脈指示における指示詞

コ系列指示詞の機能を中心に//175

- 1 はじめに //175
- 2 先行研究 //176
 - 2.1 庵 (2002) //176
 - 2.2 直示優先の原則 //180
- 3 文脈指示におけるコ系列指示詞について //181
 - 3.1 文脈指示におけるコ系列指示詞の直示的性質 //181
 - 3.2 「トピックとの関連性が高い名詞句をマークする」? //184
 - 3.3 直示的性質からみたコ系列指示詞 //186
- 4 第7章のモデル改変 //187
- 5 第10章のまとめ //189

第11章

談話中に現れるフィラー

アノ(一)・ソノ(一)の使い分けについて //193

1 はじめに——問題の所在 //193

2 先行研究 //194

2.1 定延・田窪(1995)、田窪・金水(1997) //194

2.2 アノ・ソノに関する先行研究 //196

3 話題とアノ・ソノ //199

3.1 フィラーと指示詞 //200

3.2 OPIのテスターのアノ・ソノ //201

3.3 テレビ番組のアノ・ソノ //206

4 アノ・ソノの違い //208

5 ソノの発話効果 //211

6 第11章のまとめ——指示詞理論との関連から //214

第2部のまとめ //219

第12章

本研究のまとめ //221

1 はじめに //221

2 本書で明らかにしたこと //221

3 指示詞のそれぞれの関係 //224

4 今後の研究に向けて //224

あとがき //229

参考文献 //233

索引 //239

第1部

記述的考察の部

本書の目的と構成

1 本書が目指すもの

本書では、日本語の指示詞について研究する。日本語の指示詞については、佐久間（1951）をその研究史の出発点として位置付けることが多いが、その後国語学、日本語学、言語学そして日本語教育学の中で膨大な量の研究が積み重ねられてきた。1990年代に入り、金水・田窪（1990）が談話管理理論に基づく分析を発表し、指示詞研究は大きな転機を迎えた。この理論は、Fauconnier（1985）のメンタル・スペース理論¹を応用発展させたものであるが、この研究によって初めて、指示詞を理論的枠組みの中で捉えようとする試みがなされたと言えよう。その後田窪・金水（1996）、坂原（1996）、金水（1999）などで理論的な整備が行われる一方、金水（1999）、岡崎（2001, 2002, 2003, 2010a）などが、歴史的な事実から指示詞研究にインパクトのある主張を行ってきている²。

文脈指示用法の指示詞は庵（1997）（および庵（2007）、本書では以降庵（1997）で言及する）や、彼のそれまでの一連の研究によって興味深い用法が数多く指摘、検討されてきた。庵の研究が明らかにしたことは、文脈指示用法は現場指示用法とはかなり異なった体系を有しており、談話管理理論では説明ができないデータが存在することであった。彼は文脈指示には談話管理理論とは別の理論が必要であると主張し、文脈指示用法のみを取り上げ、非常に綿密かつ詳細な研究を行った。

しかし、庵の研究にも問題はある。文脈指示用法と現場指示用法が一見全く異なった体系を有していることは、記述的には正しい。ところが、このように考えることは両者の関係を見えにくくし、そのことによ

って指示詞の本質とは何かという重要な問いに答えることを困難にしているように思われるのである。庵の研究によって、それまでより文脈指示用法の記述がより精密になり、筆者を含め多くの研究者の視線が文脈指示用法に向けられることになったことは彼の貢献であったが、あまりにも文脈指示用法に注目し、そこには現場指示用法とは異なった理論を用意しなければならないと強調しすぎたことが、上のような問題を引き起こしたのではないだろうかと考えられる。

2 本書で解決する問題

本書では上で述べたような問題を克服する理論を提出することを最終目標としている。具体的には、指示詞研究の中で重要な問題である次のようなものに答えを与えていくことになる。

1. 指示詞とは何か。指示詞は言語のシステムの中で何をしているのか。
2. 指示詞が「指示」しているものは何か。
3. 現場指示用法と文脈指示用法の関連は何か。両者には全く異なった理論が必要か。それとも、統一的に説明ができるものなのだろうか。
4. コ系列ソ系列ア系列は、それぞれがどのような関係を持って成立しているのか。

本書の中でこれらの問いに対する答えを見ていきたい。1.については、指示詞というものは外的世界と言語表現の間に存在する心的領域で行われる処理に関係するものであり、その領域の中に存在する要素を指す役割を有すると考える。また2.であるが、指示詞が指示するものはしたがって、決して外的世界に存在する対象ではなく、その心的領域の中に存在する対象なのである。このように考えるならば、その心的領域とはどのようなもので、そこに存在する対象はどのような性質を持っているのかを考える必要がある。本書第2部での仕事になる。

3.については、本書では現場指示用法と文脈指示用法は、単一かつ単

純なモデルによって統一的な説明が可能となることを示す。上述のとおり、談話管理理論では説明ができない現象が存在することは庵（1997）で指摘されているし、庵はそのような現象を別の説明装置を用いることによって解決しようとした。本書で提示されるモデルは、この両者の問題点を克服し、談話管理理論では説明できなかったような現象も含め、現場指示用法、文脈指示用法全ての用法に対して説明力を持つようなモデルである。

4.については三上（1970）が、指示詞をコ／アとコ／ソの二項対立が折り重なった構造であるとして以来、問題となっている点である。これとは逆に堀口（1978）はコ／ソ／アは3者が並立に存在しているとした。これはどちらの見解が正しいのであろうか。また、これと関連する概念として「包含型視点」と「対立型視点」（木村（1992））というものがある。包含型視点とは、話者と聞き手が同一の視点を有し指示詞を用いるので基本的にコ／アのみが出現する。一方、対立型視点においては、話者と聞き手は向かい合って対峙するため、聞き手の領域にある対象はソで指される。このような考え方は言うまでもなく三上（1970）の立場におけるものであって、堀口（1978）の立場をとるならば、このような概念とは別の概念により、現象を説明する必要があるだろう。

本書での4.に対する立場は、田窪・金水（1996）と同様、基本的にはコ／アとソが、その対象の指し方において対立すると考える。しかし、この対立は対象の指し方に関する対立であって、実際の使用の場においてはこの差はそれほど明確には現れない。したがってデータを観察すれば3者全てが使用できる環境があって当然であり、事実そうである。完全に二項対立的立場をとる研究（三上（1970）や、久野（1973）、庵（1997）など）ではこの現象は説明できないであろう。

3 本書の構成

以上のような目標・問題点を考えるべく、本書は次のように構成されている。

本書は二部構成である。本章を含む第1部は、記述的考察の部と題して、指示詞、特に文脈指示用法のソ系列指示詞を中心に扱う。これはコ